

こうして『近代思想』は廃刊になり、共通の広場の拠点は失われてしまいが、『近代思想』に見出される三つの旗じるし、すなわち社会主義の進軍ラッパ、社会主義の主体化、思想、文芸の社会化は、その後も大杉のうちに受けつがれ、この三つを軸にして、かれは独自の思想と運動を打ち出してゆくのである。

四

ところで、このような視点に立つなら、大杉流「生の哲学」を、ただちに「観念論的」ときめつけるわけにゆくまい。大杉が愛用したのは、本能とか生命、自我、精神というような非合理的な概念で、体系化された理論や、主知的な、合理的な思考にはたかい評価をあたえていない。

たとえば、「僕は精神が好きだ」（『文明批評』第二号・一九一八年二月）という感想のなかで、大杉は、「僕は精神が好きだ。しかしその精神が理論化されると大がいは厭になる。理論化と云ふ行程の間に、多くは社会的現実との調和、事大的妥協があるからだ。まやかしさがあるからだ。／精神其儘の行為は猶更稀れだ」と書いている。

ここに書かれている「精神」を「生命」もしくは「本能」と書きなおせば、大杉のいおうとする意味は、いっそうはっきりするだろう。かれは、この「生命」をそれ自体「拡充」し、「充実」してゆく「力」としてとらえている。「力」は「動作」として現象するが、この「生命」にはひろい意味とせまい意味がある。せまい意味の「

生命」は「自我」だと、かれは定義している。

こうした考え方を、ベルグソンの「創造的進化」の思想や、シュティルナーの「唯一者」の思想に結びつけて、河上徹太郎のように、「生」自我を第一次的なものとするゆえに、「観念論的」（『日本近代社会思想史』一六九ページ）とすることは、容易であるかもしれない。

しかし、一方で大杉は、「征服の事実」という現実を、『共産党宣言』の公式などによりながら強調し、「この征服の事実、過去と現在と及び近き将来との数万或は数千年間の、人類社会の根本事実である。この征服のことが明瞭に意識されない間は、社会の出来事の何ものも、正当に理解することは許されない」（『征服の事実』第一次『近代思想』第一巻第九号・一九一三年六月）と述べている。

かれによれば、「今や近代社会の征服の事実、殆どその絶頂に達した。征服階級それ自身も、中間階級も、また被征服階級も、いずれもこの事実の重さに堪へられなくなった」（『生の拡充』第一次『近代思想』第一巻第一〇号・一九一三年七月）そして、「生が生きてゆくためには、かの征服の事実に対する憎悪が生ぜねばならぬ。憎悪が更に叛逆を生ぜねばならぬ。新生活の要求が起きねばならぬ。」（同右）のである。

大杉におけるこの社会認識は、かれの「生の哲学」とともに、かれの思想の大黒柱をなしている。そして、この両者が切りむすぶところに、かれの思想の全体が形成されるわけである。したがって、片方の柱だけに注目して、それだけで評価しようとするのは、あき

らかに片手落ちであろう。むしろ、主体的な生命あるいは自我の観念を社会主義的な認識に結合させるかれの独創的な構想にこそ、着目すべきではないだろうか。

この構想が、当時の日本の社会主義の要請に一致したものであることは、すでに述べたところから推量できるとおもふ。

「征服の事実」という社会認識が、おもに『共産党宣言』の公式に依存していることはすでに述べた。大杉自身、べつのところ、僕は歴史を解釈する主要なる一導線として、所謂物質的史観を懐てゐる」（『現代社会観』一九一五年八月）『自由の先駆』四四ページ）と告白しており、かれの評論「創造的進化」（第一次『近代思想』第一巻第七号・一九一三年四月）では、自然科学、とくにダーウィンやラマルクなどの生物学説といわゆる下部構造（そういう用語はもちろんないが）との関連を、唯物史観風にとらえている。このような歴史のとらえ方は、クロポキンにはなく、やはりマルクス、エンゲルスから学び取ったものであろう。

このように、大杉は、一面、マルクス主義の観点を取り入れているが、他面、マルクス主義の陥りやすい客観主義的な偏向に対して、きびしい批判を忘れなかった。かれは、評論「生の創造」（第一次『近代思想』第二巻第四号・一九一四年一月）で、「社会主義はこの所謂物質的史観説に立脚して、社会進化の要素として経済的行程、工業技術的行程を過大視するの結果、彼の必然から自由への飛躍を、外的強迫から内的発意への創造を、単に到着点としてのみ強調して、等しくまたこれを出発点としなければならぬことを忘れて了つた」と書いている。当時、日本に紹介されていたような、客観主義的に

偏向したマルクス主義から「内的発意への創造」の「出発点」をみちぎきだすことはできない、と見て取つたかれは、それをシュティルナーの「自我」やベルグソンの「生」の思想のうちに求め、「征服の事実」という社会認識と「内的発意」という主体的な自覚との総合においてはじめて、人間解放の理論がたたく成立する、とかがえたのである。

この点で、大杉は、マルクスとベルグソンの折衷をくわだてた『暴力論』の著者ソレルのケースに似寄っている。大杉自身、ソレルを評価して、「……従来のマルクス派社会主義者の殆ど棄てて顧みなかった、主観の価値を力説した。人間其者の尊貴を高調した」（『ベルグソンとソレル』『早稲田文学』一九一六年一月）と述べている。

今日流にいえば、大杉もソレルもいわゆる主体性論者だったわけである。もし大杉が今日に生きていて、主体性を強調するマルクス主義者と知合つたら、わが意を得たりと握手したであらう。一九一〇年、二〇年代にはそんなマルクス主義者は皆無にひとしかつたからである。しかし、同時に、「そこまで来たんなら、ついでのことマルクス主義のワクにこだわるのもやめようじゃないか、マルクスは自分でおれはマルクス主義者じゃないって言つてるぜ、ヒッヒッヒッ」と、得意の警句を吐いたかもしれない。

もっとも、大杉の主体性論は、すでにみてきたように、敗戦後、雑誌『近代文学』によって火をつけられた主体性論とは、かなりことなっている。戦後の主体性論は、主としてマルクス主義者、厳密にいえばスターリン主義者の客観主義的偏向へのインテリゲンチヤ

の抵抗という形で登場しており、いわばインテリゲンチヤの「主体性」を盾にとつての居直り論といったくさみがつよい。のちになつて、インテリゲンチヤあるいはプチブルジョアよ、卑下するなかれという中間階級的な自己弁護論がでてくるが、それは戦後主体性論の志向の延長線上にあるといつてよい。

一方、大杉の主体性論は、戦後のそれとのおなじく、客観主義化したマルクス主義への抵抗を動機の一つにしているが、志向する方向はまるで逆である。かれは主体性を強調することによつて、インテリゲンチヤあるいはプチブルジョアという中間階級の温存をめざしたのではなく、むしろインテリゲンチヤあるいはプチブルジョアの主体性は、労働者階級のなかに自らを定着させ、労働者階級と一体化するところに確立されるとみている。みているだけでなく、実践に移している。

この相違は、状況の差によつても説明できようが、それだけでは十分でない。よくには、大杉の姿勢の方が、戦後の主体性論者よりはるかに先進的であるし、この姿勢は、こんにちにおいてもなお有効性を持っているようにおもわれる。戦後の主体性論者が、主体性確立の場を労働者階級の闘いのなかに求めず、逆に浮動的な中間階級の温存の方向に向かつた理由は、いろいろであらう。戦後にもすごい勢いで流れ込んだきた実存主義の影響もあらうし、ボルシェウィキ独裁がプロレタリアート独裁と錯覚されたように、労働者階級がその前衛を自称する日本共産党の陰にかくされてしまったためでもあらう。しかし、安保阻止闘争その他をつうじて、日本共産党の自称前衛の金看板がはげてしまい、労働者階級の巨大なエネルギー

感情からでなければ、本当の労働文学は生れて来ない。

本当の一体的感情は、教化とか指導とか云ふ、第三者的のしかも上の方から眺めおろした考へや態度を許さない。憐れみやおせつかいを許さない。プロレタリアと言ふ階級其者が自分自身なのだ。」

ここでは、二つの大事なことが語られている。その一つは、ほんものは「一体的感情」は、第三者的な同情や、教えてやろう、指導してやろう式のやり方からは生まれえない、ということである。それにつけ加えて、かれは、「が、プロレタリアの到る処に、此の力と生気とが溢れてゐるのではない。此の新しい感情や思想や理想が漲ぎつてゐるのではない。それは、ほんのただ、其の前衛の中にだけだ。其他の大部分の中では、単なる憧憬として幽かに現はれてゐるか、或は潜勢力としてごく奥深くに隠されてゐるに過ぎない。そして、寧ろ無力其者、死其者のやうに見へる」と述べている。

したがって、インテリゲンチヤが自分の主体性を確立するためには、たんに漫然と労働者階級のなかに入つてゆくのではなく、労働者階級の巨大なエネルギーの核ともいふべき前衛のなかに、階級闘争の第一線にある戦闘部隊のなかに、参加しなくてはならない。「誰れかれのやうにブルジョワののらくら息子の真似をして、憂鬱の虫をかみつゝしてゐる労働者を捉へたのでは駄目だ。前衛の労働者を捉へるのだ。それと一体になるのだ。そして其処に、他の大部分の民衆の幽かな憧憬をはつきりさせ、又奥深く隠してゐる其の潜勢力をそとに出させる、大きな誘導力を造るのだ。」

しかし、ここで注意しなくてはならないことがある。それは、前衛のなかに入つてゆくとときの入り方である。「新入会の諸君が友愛

ーが闘いの前面におしだされてきたいま、大杉の主体性論のもつ今日の意味が鮮かに浮びあがつてくる

大杉が、インテリゲンチヤの主体性の確立を、労働者階級のなかに自らを定着させ、労働者階級と一体化するところと求めたのは、いうまでもなく、労働者階級こそ明日の階級であるという認識にもとづいている。けれども、この認識は、たんに歴史の必然という史的唯物論の公式だけで裏書されたものではない。いわばそのような頭から理性的な認識に加えて、本能というか、実感というか、からだ全体による直観的な認識がプラスされている。大杉は、それをつぎの三つに分けている。第一は、「周囲の圧迫に就いての敏感と、其の圧迫に対する強烈な反抗本能」、第二は、「労働者階級の人々の無知と愚昧と困窮」に対する「人道的情熱」、そして第三は、「労働者の悲惨な生活に対する憐愍とか同情とかではなく、却つて其の生活の中に同化してしまつたい」欲望である。このうち、大杉がもっとも高く評価したのは、第三の、労働者階級のなかに潜んでいる「偉大なる」エネルギーであった。大杉は、これを「労働者の社会的創造力」と名づけているが、この「社会的創造力」を直接に実感し、感動したものだけが、史的唯物論ないしは社会主義理論の提供する知識をたんに概念としてでなく、真理として受けとめ、実践に移すことができるかと論じている。たとえば、「労働運動と労働文学」(「新潮」一九三二年一〇月)のなかで、大杉は、こう言っている。

「謂はゆる労働文学者等の云ふ階級的意識と云ふのは、一口に云へば、彼等と労働者との一体的感情なのだ。そして又、此の一体的

会へはいつて行くやうに、直ちに最高幹部の一人となり指導者となる事であつてはならない。一兵卒としてはいつて行くのだ。それでなければ、先にも云つたやうに、一体的感情はどうしても得られない。自分一人がそうなつた氣でいても、ほかの労働者が許してくれない。いつまでもやはり他人として見る。」これは、かなり重要な注意書だともう。労働運動が、真に労働者解放の力となるか、あらたな支配と搾取の發生の前に挫折するかは、一つには、いづれの入り方を選ぶかにかかつている、といえるからである。

これらの点で、大杉の「労働者階級の中へ！」の主張は、いわゆるナロードニキの「人民の中へ！」とは、形の上では似ていても、内容的にかなりちがつてきている。クロボトキンなどを通じて、ナロードニキの思想に大杉が影響されたことは、かれ自身も認めるところだが、大杉の場合には、ナロードニキにみられるような啓蒙的な、人道的な色彩はない。滅びゆく中産階級に生まれた者の生きのこる道として、みずから手でその絶滅を期し、それによつて労働者階級の中への再生のきつかけをつかもうとしたのが、かれの主張の主内容であり、同時にまた、かれの生涯のライトモチーフの一つでもあつた。

革命家としての大杉についてはしばしば語られるが、中産階級から脱出し、労働者階級のなかに入りこみ、「小紳士的感情」を絶滅して、前衛労働者と「一体的感情」をわちあおうと悪戦苦闘した人間大杉の側面こそ、おなじくプチブル出身であり、インテリゲンチヤのはしくれであるべくには、最大の魅力となつてゐる。

大杉が、まさに引用した論文「労働運動と労働文学」を書いたの

は、一九二二年一〇月、それからちょうど一年目に殺されたのだから、いつてみれば、かれは、死にいたるまで、自分のなかにある中産階級的、「小紳士的感情」と闘い、その克服に心を砕いていたわけである。

かれの内部での格闘を明らかに語ったものとしては、ほかに土岐善磨への私信の形で書かれた「藤椅子の上にて」(一九一四年四月)——『自由の先駆』三三八ページ)や、亀戸の労働者町に居を構えた後の評論、「小紳士的感情」(『文明批評』第二号・一九一八年二月)などが代表的である。いずれもおなじテーマを、するどく追及し、「藤椅子の上にて」では、土岐の詩「書斎にて」の最後の二句を引いて、「否、否、否、このま、にいつまであらん」と結び、「小紳士的感情」では、「お互の間の小さな主観や、野心や、従つて其処から起る妙な嫉妬などを一切なげうつて、ただ本當の労働者と一つになつて了はなければ、とつくづく思ふ」と、年来の念願を曲りなりにも果たしたあと感慨を語っている。

もっとも、亀戸の労働者町にいたのは、一九一八年一月から七月までの六ヵ月あまりで、『労働新聞』の廃刊を機に田端に移り、それ以後はほとんど、かれのいわゆる「小官吏や小番頭なぞと云ふ中産階級の逃げ場所である静かな郊外」を転々として暮らしている。

その間の事情はよく分らないが、そのことへの自己批判が、「労働運動と労働文学」の最後の一句「何よりも先づ、労働運動の行為の中へはいつて行かう。事実の中へはいつて行かう。これが一切を産む母なのだ」にじみ出ている。

ぼくの考えでは、大杉のきびしい内部での格闘、石川三四郎流に

奪階級が製造して、われわれ被掠奪階級に無理強ひする一切の社会的・政治的・道德的の理論と感情とを放擲して、……われわれ自身の世界を建設するとともに、またその社会的実現を謀らねばならぬ」と、闘いのあり方を示している。

この巻頭の、そして発刊の言葉のなかに、大杉の労働運動論の原型が、すでにはつきり現われている。それは、第一に、階級的観点の強調であり、第二に、労働者自身の主体性の確立を通じて、労働者自身の社会の実現によって支えられている。

大杉がそのインテリゲンチヤ論において、インテリゲンチヤの主体性確立の道を、労働者階級の前衛への定着のうちに見出したことは、まえに述べたとおりだが、労働者階級に対しては、資本家階級との妥協のない闘いによつてのみ、その主体性は確立されると説いている。妥協のない闘いとは、たんに権力の掌握をめぐる政治的、経済的な外での闘いだけでなく、自分のうちにある「資本家的思想」、「資本家的感情」との妥協のない闘いを意味しており、ここに大杉の労働運動論のいちじるしい特色が見出されるわけである。

しかし、『平民新聞』は、出す号、出す号ことごとく発禁、差し押さえという弾圧の前に六号をもって廃刊され、一年後の一九一五年一〇月、第二次『近代思想』をもつて再出するが、これも発禁相つぎ、四号の短命で終わっている。

一方、『センヂカリズム研究会』の方も、一九一五年、『平民新聞』の刊行に見合つて「平民講演会」と改められたが、その年の暮から翌年にかけて、大杉と荒畑の間に思想的なひびが生じ、それに

いえば「生活態度の革命」が、たえずくりかえし行われていたところに、かれが、逆に労働者階級のなから革命的なエネルギーを引きだし、盛りあげてゆくことのできた秘密の一つが転つていようにおもわれる。かれがもし革命家らしい革命家であつたとすれば、それは、一つには、かれが痛いほどに自分のなかにある「小紳士的感情」、プチブル根性を叩きのめし、そのことによつて労働者の前衛と「一体的感情」を獲得しようとする骨身をけずつたからではあるまいか。

五

大杉栄が、伊藤野枝、和田久太郎、近藤憲二らと、雑誌「労働運動」を創刊したのは、一九一九年一〇月のことであつた。

すでに大杉は、『近代思想』を発行するかたわら、「センヂカリズム研究会」を定期的に開いて、革命的労働運動の拠点作りに心をくばり、やがて、一九一四年一〇月には「僕らの真の友人たる労働者を相手」とする「平民新聞」をひきつけて、革命的労働運動の推進に踏み切っている。

『平民新聞』第一号の巻頭に掲げられた「労働者の自覚」は、大杉によつて書かれたものだが、かれは、そこで「雇主はわれわれの生活の協力者ではない。彼等は掠奪者である」として、階級的観点を前面に押し出し、「われわれは先づ、現代社会の根本に横たわるこれらの事実を、真に明確に理解せねばならぬ。……そして彼等掠

拍車をかけた一九一六年の葉山事件を頂点とする大杉の多角的な恋愛事件もからみ、一頓座をきたしている。

「大杉をめぐる三人の女」という映画の題名にもなりそうな堀保子、神近市子、伊藤野枝をめぐる大杉の恋愛については、かれがかねがね提唱していた自由恋愛論の実践とみる説、『平民新聞』や第二次『近代思想』に対する政府官憲の、真綿のどをしめあげるような知能犯的弾圧と、「のれんに腕押し」といった感じのいわゆる同志たちの無気力な態度に手も足もでなくなった結果とする説など、いろいろに解釈されている。この恋愛についての大杉の心境は、「男女関係に就いて——女房に与へて彼女に対する一情婦の心情を語る文——」(『女の世界』一九一六年五月二二日)にもっともよく表現されているとおもうが、要するに、一夫一婦制度のもつ矛盾と取り組み、この壁を突き破ろうとして、七転八倒したかれの主体的な自我のしたたかさが、この事件の核心をなすものといえよう。

かれが、この「男女関係に就いて」のなかで書いているいわゆる三条件、「お互ひに経済上独立する事、同棲しないで別居の生活を送る事、お互ひの自由(性的のすらも)を尊重する事」は、いわば大杉のえがいた男女関係の理想像であり、「どうかすれば、もう五年か十年かすれば、こんな風の内容の、尤も形式にはいろいろ変りはあらうが、たとへば同じ自由恋愛でも或は一夫一婦の、或は一夫多婦の或は多夫多妻の種々なる形をとる事が出来やうが、男女関係は、大して珍しい事でもなく」なる、と希望的な見解を示している。

「平民労働者の成就せんとする革命は政治組織や経済組織の革命ばかりではない。社会生活其者の革命である。人間生活其者の革命

である。人間の思想と感情、及び其の表現の仕方、の革命でもある。「(「民衆芸術の技巧」『正義を求める心』三三二ページ) こういう立場に立っていた大杉が、性の分野でも非人間的な関係に反逆し、あらたな、解放された性関係の実現をめざしたとしても、不思議はない。

しかし、大杉のこうした「実践」は、世間一般ばかりでなく、いわゆる「同志」の間にさえ、すくなくならぬ波紋を生じ、大杉と伊藤はしばらくの間、孤立をよぎなくされる。二人の間に生まれた長女に、「魔子」という名前をつけたところからも、かれらのおかれていた状況が推察できよう。

これに関連して思い出されるのは、幸徳秋水と菅野スガとの恋愛事件である。このときも、二人は同志の多くからはげしく非難されている。山辺健太郎は、「晩年の秋水は、革命家の風上におけないほど墮落した人物だと思ふ」(片山潜 幸徳秋水 堺利彦)『中央公論』一九五五年一月といひ、その理由として、幸徳が、赤旗事件で入獄中の荒畑の妻菅野と一緒に、その上、大逆事件で入獄したときには、離別した妻師岡千代子からも平気で世話になっているなどをあげている。既成のモラルからいえば、山辺の憤慨はもつともであるかもしれない。しかし、妻とか夫とかいう一夫一婦制の枠そのものが人間解放の邪魔になっている、というあらたなモラルの観点に立つなら、むしろ山辺の倫理観の古くささこそが指摘されなくてはなるまい。

社会主義の主体化という命題の正当さが、ここでもまた立証されている、といえようが、いずれにせよ、大杉は、この事件の渦中か

ら伊藤という好判侶を得、あらたな人生に踏みだす運びとなる。

その第一歩が「文明批評」の創刊であり、亀戸の労働者町への引越しであり、つづいて「センヂカリズム研究会」「平民講演会」の後身ともいえる「労働問題座談会」への参加、「労働新聞」の発刊、さらには「北風会」の結成と、かれの労働運動への情熱は、一九一八年後半から一九九年にかけてめざましい勢いで発展していった労働運動の波に乗って、急ピッチでたかまつてゆく。雑誌「労働運動」の創刊は、まさにその頂点に位置しているのである。

まえに引用した論文「労働運動と労働文学」のなかで、大杉は、「今まで僕が書いて来た論文の中でも僕が多少自負してゐるものは、論集『正義を求める心』の中の第四章、即ち主として労働者の実際の運動を扱つたものだ」と述べているが、『正義を求める心』第四章に収められた論文は、「労働運動の精神」「社会的思想論」「労働運動の転機」「知識階級に与ふ」外七編で、いずれも「労働運動」に掲載されたものである。その意味からも、一九一九年一〇月から二〇年六月まで、六号を数えたいわゆる第一次「労働運動」は、大杉の思想形成に重要な役割を演じているといえよう。

ぼくは、そこで、これらの論文を中心に、大杉の労働運動論の骨組みを眺めてゆこうとおもう。

まず、労働運動とはなにか、という本質規定。これについては、「労働運動の精神」(第一次「労働運動」第一号・一九一九年一〇月)のなかで、大杉は、つぎのようにいつている。

労働運動というと、賃上げと労働時間の短縮、この二つの要求がふつう思い浮かべられる。それはたしかにそうにちがひなく、すく

なくとも初期においては、この二つの要求を中心に労働運動は闘われてきた。しかし、このような「生物的要求」(今日流にいえば経済要求)だけに終つては、本当に値打ちのある労働運動とはいえない。労働運動がほんものになるためには、「人間的要求」がかがげられなくてはならない。

それでは、「人間的要求」とは何か。かれにいわせると、「近代的自意識」「自分で、自分の生活、自分の運命を決したい」という、労働者の心のなかで、ときには、「蠡め」き、ときには「怒濤のやうに暴れ狂ふ」何物かである。それは、「専制君主たる資本家に対しての絶対的服従の生活、奴隷の生活」に終止符を打とうとする要求である。

大杉は、検閲を考慮してか、「人間的要求」という用語をもちいているのだが、言論の自由のまがりなりにも確保されている今日の言葉になおせば、「政治的要求」あるいはもっとするどく「革命的な要求」と書き改めてよいだろう。

つまり、労働運動を経済闘争の枠内に封じこもうとする友愛会流の改良主義、労資協調主義の壁を突き破つて、政治闘争、革命闘争の戦列に労働運動を位置づける革命的サンジカリズムの主張が、大杉の労働運動論のいわば本質論をなしている。

政治闘争は政党に任せて、労働組合はもっぱら経済闘争に専念せよ、という労働組合主義は、日本では、友愛会以来、総同盟、全労会議、同盟会議と一貫して受けつがれている。かつて総評民主化同盟左派の提唱した日本的組合主義も、多少政治闘争に色気はみせているが、つまるところは労働組合主義左翼といったところで、労働

組合の任務は政党の圧力団体にあることにかわりはない。

これに対して、大杉の提唱した革命的サンジカリズムは、労働組合が経済闘争にとどまらず政治闘争、革命闘争に主体的に参加することを要請している。すなわち、労働組合(サンジカ)が、政党を媒介せず、直接に支配・搾取権力と対決する形態をとるのである。

この点で、それは、労働組合を共産党の従属組織とみる、全協―産別会議につらなるいわゆる赤色労働組合主義とも、根本的に異なる。ごく大づかみにいうなら、労働運動そのものを革命の前提たらしめる、というのが労働運動に対する大杉の本質規定である。

もつとも、ここで、誤解のないようにつけ加えておくが、革命の前衛だからといって、労働運動から経済要求を排除せよ、と、大杉がいつているわけではない。一九二二年一〇月の全国労働組合総連合大会決裂後まもなく書かれた「労働運動の理想主義的現実主義」(第三次「労働運動」一九二三年一月)で、かれは、労働運動はたんなる労働条件改善の運動でも、またたんなる資本主義打倒の運動でもない、「アルファからオメガまでのものだ」といい、日常闘争(経済闘争)と政治闘争(革命闘争)とは、同時に遂行されなければならない、として、「僕はそれを労働運動の理想主義的現実主義と云ひたいのだ」と書いている。

理想主義的現実主義という表現は、大杉が「近代思想」時代にもちいていた社会的個人主義などとともに、弁証法的論理の愛好者であったことを示すものだが、同時に、このような言廻しのうちに、かれの意図する苦心が、よく窺われるようである。

これに関連して、議会主義の問題がある。大杉が活動していた当

時の政治闘争の主要な目標は、普通運動であり、大正デモクラシーは、まさにその理論的な背景をなすものであったが、大杉は、労働運動がこのような政治闘争にまきこまれ、政党のヒモつきとなって、その戦闘力を失うことを、つよく排撃していた。かれにいわせれば、「参政権とは人間としての棄権であり、国政とは人間を黙殺することである。」「議会は自由を与へるところでなくして、自由を承認するところである。」「いづれも「個人主義者と政治運動」「正義を求める心」所収」自由は、「国民の自由と叛逆の精神によつて」、「叛逆的行為」すなわち直接行動に訴へて、議会から「もぎ取り」、おなじ精神によつて「不斷に防護」し、ふたたび奪われそうになれば、ただちに「叛逆的行為」に出る用意のある国民にのみ保証される。議会は、実質的には、このような「自由と叛逆の精神」を殺し、「叛逆的行為」を抑圧する機関でしかない。このような機関にのぞみを託し、その強化につとめることは、労働者階級の解放をおくらせるのに役立つにすぎない——これが、大杉の議会主義に対する見解である。

この見解のなかにふくまれている新しさは、ほとんど予言者的な響きをもっているように、ぼくはおもえるが、かれが、労働運動から政党をオミットし、労働運動自体の前衛化を構想した根拠の一つは、まさしくこの議会主義批判にある。

さて、それでは労働運動が政党を媒介にせず革命の前衛となるための前提条件はなにか、これがつぎの問題となる。それに答えて大杉は、やはり「労働運動の精神」のなかで、そのためには、まず、労働者階級が「労働者階級自身」をもたなくてはならない、

ぐつておこなわれたものであり、大杉は、そのとき、いわゆる自由連合派の理論的指導者として、総同盟側の集中的合同論と論争したのである。

大杉は、この論争において、自由連合の組織について、つぎのように説明している。すなわち、自由連合とは、集中的合同論のチャンピオン山川均らが曲解しているように、「個人の絶対の独立と自由」を主張するものではない、相対的に組合内の各個人の独立と自由を強調し、さらにまた、各単位組合の独立と自由を強調する「個人本位的団体主義」である。ここでもまた、かれは、お得意の折衷的表現をもちいているが、このことは、かれがつねに現実に密着して思考し、山川のような「理論屋」でなかったからであろう。

大杉は、この論争においてもつねに「気分」といういわば理論化される以前の觀念の原型に注目し、「理屈はどうでも、それじゃ腹の虫が承知しねえ」という、その「腹の虫」に立脚して、議論を進めている。ここが、大杉の思想にとつて、とくに重要な点なのだが、かれによれば、自由連合は、労働者の、「職長、組長、或はそれ以上の権力者に監視されるところの束縛をのがれて、如何なるところに於ても」の人間として行動したいといふ「気分」のなから自然につくられていった組織論なのである。大杉は、自由連合論を架空論とか思想中毒とする批判に答えて、自由連合論者は「飽くまでも彼等自身の現実に立つて行く」理想主義的現実主義者である、と論じている。また、自由連合論を力の分散と誤解する労働者に反駁して、大杉は、理屈や上からの命令でなく、労働者一人一人の気分を尊重し、その上に立つて自主的に組織することこそ、真の力の結集

としている。いいかえれば、労働者階級が「人間的要求」をしつかりつかむこと、「自分自身の生活、自主自治の生活」を獲得すべく意識し、「自主自治的能力」を充実させることが、前規条件になる。今日流にいいかえれば、労働者階級の主体性の確立こそが、革命的サンジカリズムを成功にみちびく決定的な鍵なのである。

六

まえに述べたように、大杉は、労働者階級のうちに内在している明日を創る力を確信していたが、しかしその自然な成長を手放しで樂觀していたわけではない。インテリゲンチヤの主体性の確立のために、生涯を賭けたといつてもいいすぎではない大杉は、労働者階級の主体性の確立を、労働組合による組織化のうちに求めている。

すなわち、かれは「労働運動の精神」において、「そして僕等は労働組合の組織を以て、此の僕等自身を支持する最良の方法であると信ずる」と述べ、労働者階級の主体性の確立、「自主自治的能力」の充実、労働組合をつうじてはじめて可能となる、としている。かれによれば、労働組合は、労働者の自主自治能力の充実の表現であり、この自主自治の能力を発揮し、資本家の専制支配をくつがえすための機関であり、同時に資本制社会打倒後の労働者社会の基礎ともなる、まさしく一石三鳥の機能を備えている。

しかし、この機能を十分に働かすためには、どんな労働組合でもよい、というわけにはゆかない。ここに労働組合の組織の問題がこつてくる。一九二二年の総連合の決裂は、まさにこの組織論をめ

である、という意味のことを述べている。

さらに、大杉は、集中的合同論にするとい批判の鋒先を向け、集中的合同論の真のねらいは、労働組合の戦闘力を強化することではなく、じつは労働組合を支配する権力を強化するところにあることを見破っている。かれは、それを「山川のお手本のロシアのボルシエビキのお得意のやり方」ときめつけ、自由連合の労働者たちは、「ロシアの二の舞、即ち革命を起したあとで直ぐ又其の革命をやり直さなければならぬやうな轍をふむまいとしてゐるのだ」と、ただしく指摘し、自由連合が、集中的合同（中央集権）か、二者択一は、たんに「労働者ばかりの問題ではなく」、まさに社会運動の、革命運動における二大潮流であることをあきらかにしている。

明治の社会主義運動を二分した直接行動論対議会政策論が、すでに述べたように、戦術論争であつたとすれば、大正の労働運動を二分したこの論争は、組織論争であるといえよう。しかし、この二つの論争の本質をえぐるなら、その底には自由を撰ぶか、権威を撰ぶかという二者択一をつきつけられた社会主義の歴史のすべてがよこたわつてゐるとみられよう。大杉はこのことを的確に見抜いて、自由連合論の歴史的な位置をはつきりつかんでいた、こういつても言いすぎではあるまい。

大杉らの主張した自由連合論を、こんにちの時点に引きなおしてみれば、組合官僚主義と闘う組合民主主義のうちに、その残映をみることができる。こんにちいうところの組合民主主義は、民主主義そのものとおなじで、具体的な内容を失い、労働官僚どもの手あかに汚れたスローガン化しているけれども、しかもなお、労働者の

エネルギーを引きだし、労働組合の組織をつよめ、かためる役割を完全になくしたわけではない。組合民主主義が、新鮮なヴィジョンを労働者に提供し、労働組合を政党や組合官僚の手から真に労働組合員の手へ奪い返す武器となるためには、大杉らの自由連合論の持つ意味が再検討され、それとの接合が試みられなくてはなるまい、とぼくは考えている。

ただここで、一つ疑問が残る。それはフランスのCGT、アメリカのIWW等、革命的サンジカリズムをかかげる労働運動が、いずれも、職能別組合組織に対抗して、産業別組合組織を一つの旗じるしとして、展開されていったのに比べて、日本のサンジカリズム運動では、この問題が重要な争点とならず、あまり強調もされていない点である。これは、日本の労働運動そのものの歴史の浅さ、日本資本主義の一貫した労働政策にもとづく封鎖的な労働市場等々によるものであろうが、じつはそこに日本のサンジカリズム運動のもろさがひそんでいたようである。当時でも、横断組合（産業別あるいは職能別組合）、縦断組合（業別組合）についての議論がなかったわけではないが、自由連合対集中的合同の組織論争が、このことにはほとんど言及していないのは、はなはだ物足りない。

好意的な見方をすれば、労働組合といっても、ほんの一握りの意識的な労働者の集団の域を出なかった当時においては、産業別か、職能別か、あるいは企業別かという問題は、理論上の問題にとどまり、切実な、実践上の課題となっていなかったのだ、ということもできよう。労働者の気分のなかから理論を汲みだそうとする大杉にとつて、それが労働者の切実な課題となっていない時点では、あえて論

ずるに及ばない、とかんがえていたのかもしれない。

大杉自身、自由連合論の理論的な未成熟は十分弁えており、その展開をこんごに期していたとみられるふしがある。「社会的理想論」（第一次「労働運動」第六号、一九二〇年六月）でとなえられた白紙主義は、このことを端的にあらわしている。

白紙主義というのは、いわばプラグマチズムの一変形ともいえるべき主張だが、要点は、人生が、「予め定められた、即ちちゃんと出来あがつた一冊の本」ではなく、「各人が其処へ一字一字書いて行く白紙の本」であるように、労働運動もまた、「労働運動と云ふ此の白紙の大きな本の中に、其の運動によって、一字一字、一行一行、一枚一枚づつ書き入れて行く」ものだ、ということにある。

労働者の目の前には、かれらを解放する理論として、すでに無政府主義とか、マルクス主義とか、サンジカリズムとか、ギルド社会主義等の見本が提供されている。しかし、これらの理論と、日本の労働者の現実とは「まだ大分距離がある」。この現実を無視して、ただ理論を買入れても、力にはならない。「僕等はやはり、僕等自身の気質と周囲の状況とに応じて、僕等の現実を高めることに努力しつつ、それによって僕等相応の概念と理想とを求める外はないのだ」と、大杉はいつている。「信者の如くに行動しつつ、懷疑者の如くに思索する」という有名なかれの標語は、このような考えを背景にしている。

この考えは、すでにみてきた気分主義のうちにあらわれており、もっと早く『近代思想』で企画した、今日流にいえば生活綴り方のような、自分の村や町の実態調査を行って、「征服の事実」を理論

からだけでなく、自分の血肉をつうじて理解させようとする試みもまた、おなじ思想を背景としている。

大杉をもっともよく理解した一人であり、福田大将を狙撃して果さず、秋田監獄で縊死した和田久太郎は、一九一四年一月、獄中から近藤憲二あてこう書いている。「村木（源次郎）は嫌やがるだらうが、僕は、大杉の『白紙主義』にもう一度還る必要があると信じてゐる。他にも沢山反対者はあるだらう。……しかし大杉の『白紙主義』は単なる白紙ぢやなかった。白紙に書いて行くものの力！創造力を信じていた。……大衆と共に書け、それが如何に遅くとも！そして、如何に書くべきかを強く示しつつだ。」（改造文庫版『獄窓から』九三―九四ページ）

この手紙は、大杉なき後のアナキズム、サンジカリズム陣営にはびこっていた教条主義的傾向への批判として書かれているが、大杉がもつとも憎み、運動の発展を阻むものとしておそれたのは、社会運動につきものの、この教条主義であった。

しかし、大杉が、労働組合の組織論のなかで、自由連合か、中央集権か、という一般論にとどまり、社会経済構造と切りむすんだ次元での組織論に力がいれなかった一つの理由は、かれのアプローチの仕方が、社会学的であり、経済学的でなかった点にあるようにおもわれる。

大杉は、のちに述べるように、一九二一年、近藤栄蔵、高津正道ら「ボルシェウィキ」と協同して、第二次「労働運動」を発刊するのだが、その意図するところは、その第一号にのつた「日本の運命」に語られている。この小論は、いわば大杉の予言で、かれは、第一

次大戦後の東アジアの政治情勢を分析し、日本が「ロシアと朝鮮と支那とを敵として戦」わなければならないときがきつとくるという、その時に、「日本そのものの分裂」すなわち革命がくると予言している。

つまり、日本革命近し（かれは一二年後と予想している）の判断の上に立つて、第二次「労働運動」は発刊されたのだが、しかし、それでは、この革命にたいしてどう対処したらよいか、の問に答え、て、「僕等の態度は『其時』になつてきめていい。けれども、今から心がけてるなければならないのは、前にも云つた、いつでも起つ準備がなければならない事だ」としかいえず、その準備の内容についても、「労働者自身の判断、労働者自身の常識を養へ。そして其の常識を具体化する威力を得んがための、十分なる団体的組織を持つて」というような、抽象的な発言にとどまっている。

このことは、資本制社会にかわるべきあたらしい社会体制についての考察の貧しさにも関連している。かれは、この問題について、「政治的には連合主義、経済的には共産主義」という公式的な規定しかあたえていない。一つには、これらの問題を公けに議論する自由を持たなかったためあろうが、かれ自身も、労働者の自然成長性に期待を寄せ、そういうことはそのときにならなければわからない、とかんがえていたらしい。

大杉の思想には二本の大黒柱があり、その一本が「主体性」をあくまで主張する「生の哲学」だとすれば、他の一本は「征服の事実」を強調する社会認識となることは、すでに述べた。この視点を、いまの問題に適用するなら、つぎのような解答がえられるであらう。

すなわち、大杉の場合、社会認識は、おもに社会学的な方法が中軸になっており、オリジナリティに乏しく、けんらんたる「主体性」の背後におしやられてしまったような感がふかい、と。

もつとも、大杉は、働き盛りで、これから一仕事も、二仕事もやろうという三八歳に、突如として、絞め殺されたのだから、思想がいびつなままのこされたとしても、止むをえないことかもしれない。

七

近藤憲二が、『私の見た日本アナキズム運動史』でいっているように、「無政府主義者は最初からロシア革命に反対したのではない」、「むしろ、革命ロシアと連絡をつけるのにもつとも熱心に日本で動いたのは、アナキストないしアナルコ・サンジカリストであった。一九二〇年一〇月、コミンテルンの主催で、上海で開催された極東社会主義者会議に出席したのは大杉であり（はじめ堺、山川へ招請がきたが、かれらは出席を拒否したので、大杉のところへ廻ったものである）、一九二一年二月、モスクワで開かれた極東民族大会に、危険をおかして参加した日本の労働者のほとんどが、自由連合派に属していた。この事實は、当時において、もつとも革命的だったのは、アナキストないしアナルコ・サンジカリストであった、ということを示している。そして、また、それゆえに、かれらは、ロシア革命を死にいたらしめる元凶としてボルシェヴィキ政権を、もつと早く告発し、かつ手厳しい批判、攻撃を加えたのである。

くびり殺たのが、ほかならぬボルシェヴィキである。

大杉が、「ロシア革命は誰れでも助ける。が、そんなボルシェヴィキ政府を誰れが助けるもんか」「何故進行中の革命を擁護しないのか」「第三次「労働運動」第七号・一九二二年九月」とたなかを切ったのも、この点を理解すれば、納得できよう。ロシア革命の発展を望めば望むほど、ボルシェヴィキ政権の存在は邪魔になる——前門の虎、後門の狼というのが、ロシア革命における労働者、人民の状況だったのである。

スケールははるかに小さいが、日本はじまって以来といわれた一九六〇年五月一九日より六月二二日にかけての反安保闘争においても、質的に似寄った状況が現出されていた。すなわち、人民大衆のエネルギーは、革命的といつてよいほどに盛り上り、いくつもの自主的な行動グループがつくられていったのに対して、指導部の国民会議は、このエネルギーの核をつぶし、大衆のエネルギーを抑圧し、かれらの権力をかためる方向へ横流しさせることに狂奔していた。大杉が、もし今日生きていたら、「人民大衆とはともに闘うが、国民会議なんか誰がいうこときくものか」と怒鳴りつけたことであらう。

すでに繰返し述べているように、人民大衆、とくに労働者階級のうちに貯えられている創造的、革命的エネルギーへの大杉の確信はゆるぎのないものであり、かれの思想と行動をつらぬく筋金は、まさしくこの確信にあったといつてよい。それは、マルクス主義とかアナキズムというような既存の理論に優先し、どのような理論であれ、それがこの確信にそむき、あるいは裏切るようなものである場合に

大杉が、かれにいわせれば、「随分長い間遠慮してゐた」「ボルシェヴィキ政府に対する批評！」を、本格的に開始したのは、第二次「労働運動」による、いわゆるアナボル協同戦線が内部崩壊した翌年、すなわち、一九二二年一月三たび刊行された第三次「労働運動」においてである。

大杉の、ロシア革命論は、一九二二年一〇月に発行された『無政府主義者の見たロシア革命』（アルス版『大杉栄全集』第二巻所収）にまとめられているが、その基本点は、その序に語られているように、「ケレンスキイの民主政府を倒した十月革命は、主として「革命は如何にして為されなければならないか」を僕等に教へた。そしてそれ以来の謂はゆるボルシェヴィキ革命の進行は、主として「革命は如何にして為されてはいけなからぬか」を僕等に教へた」という一点にしばられる。

すなわち、大杉によれば、ありうべき革命は、人民大衆の自由な創造的、革命的エネルギーの最大限の発輝を、最大限可能とする原則にもとづいていなくてはならず、革命家の任務は、人民大衆のなかに内在するこの創造的エネルギーを引きだし、このエネルギーの発輝を阻害するものを徹底的に粉碎するところにある。ロシア革命において、怒濤のように巻き起こった人民大衆の蜂起と、自然発生的につくられていった「ソウエト」は、まさしく、ロシア人民の革命的エネルギーの所産であった。ロシア革命はこの「ソウエト」、労働者、兵士、農民の自治自衛機関を基盤とするあたらしい社会を創造する豊かな可能性をもっていた。この可能性を阻止し、上からの権力支配によって、ロシア革命の生命であった「ソウエト」、を

は、けつして受けいれようとはしなかった。大杉にとって、アナキズムという名で一括されうる理論が正しいとされる理由は、それがこの確信にもとづいて、それを助長し、促進することを自らの課題としているからであり、それ以外のなにものでもなかったのである。プロレタリアートの独裁という、いわばアナキズムとボルシェヴィズムの対立の焦点であるかのように宣伝された問題についても、かれは、それが、「すべての権力をソウエトへ」というロシア革命の最初のスローガンにあらわされたような意味での、「ソウエト」の連合権力によるブルジョア階級の根絶（みな殺しということではなく、ブルジョア階級そのものをプロレタリアートの中へ解体せしめる）のことによって無階級社会への展望を切り開く過渡的処置である場合には、異論はない、と明言している。かれが極力反対したのは、プロレタリアートの名を借りた「ボルシェヴィキ」という一党派の独裁であった。このことは、こんにち、ようやくひとびとの間で気づかれはじめつつあるが、それをいちはやく見破った大杉の鋭さは、この確信に裏打ちされた自由な精神の所産といえよう。

また、大杉が、アナルコ・サンジカリズムの偏向というレッテルを貼られて弾圧された、ボルシェヴィキ内のいわゆる「労働反対派」の運動につよい関心をしめし、はるかに声援を送っている事実も、ここにとくに記しておきたい。かれのこの関心は、ウクライナにおけるマフノ運動へのつよい関心（かれの渡欧の目的の一つはマフノ運動を研究するためだったといわれる）や、マフノ運動に批判的態度をとったロシアのアナキスト、アナルコ・サンジカリストへのきびしい反批判などとともに、大杉の思想態度を如実に物語っている

ものといえよう。

八

一九二三年、せっかく密航したフランスを追放になり、「凱旋將軍」のように帰国した大杉を待っていたものは、同年九月一六日の悲劇であった。大杉の死因について、甘粕大慰説、麻布三連隊説など、多くの疑惑がのこっているが、それは歴史家の詮索に任せるとして、最後に、ぼくは、河上徹太郎にまねて、もし大杉が生きていたらどんな生き方をしたか、それについてのぼくの感想を記しておきたい。

河上の伝えるところでは、神近市子は、「あの人は結局運動から脱落したでしょう」：「さあ。内田魯庵のような文章でも書いているでしうか」(『日本のアウトサイダー』——大杉栄の章——)といっている。また、『未刊大杉栄遺稿』の編者安谷寛一は、「若し彼が生きていたら、持ち前の叛逆的精神は、彼を生物学に没頭させてしまひはしなかつたとしても、さて、アナルコ・サンデイカリストとしての運動にはとつくの昔見切りをつけてゐたに違ひない」(『未刊大杉栄遺稿』四九八ページ)と述べており、敗戦直後、『民報』に、近藤栄蔵の「大杉が生きていたら、日本の共産主義者になつたらう」という意味の談話が掲載されたように憶えている。一九六〇年に開かれた大杉栄研究会の席上で、人間大杉を語った荒畑寒村は、帰国後、大杉が荒畑夫人に「フランスではアナキストより

共産党の方が親身だった」というようなことを語ったのを聞いた記憶がある、と話をしているし、近藤憲二は、帰国後、大杉が近藤を九州へ派遣したり、震災直前に全国的なアナキストの集会を召集したりしたという、あたらしい事実を病床から寄せ、近藤とともに『大杉栄全集』を編さんした安成二郎も、神近説に反対し、「あれだけ個性のつよい人だつたから、脱落したとおもえない」と語っている(以上については『自由思想研究』一四・一九六〇年七月参照)。

死者に口なし、生きているものが、それぞれの希望的コース(各人が辿ってきたコースと至近距離にある)を、死者の未来にあてはめて語つたにすぎない、といえればそれまでのことだが、ぼくは、一九二一〜二二二三年ごろから大杉がふたたび「バクウニ熱」にかかっている事実注目したい。大杉は、一九二〇年に『クロボトキン研究』が一段落したので、さかのぼってバクウニンに取りかかったのだ、とみてみられないこともない。

しかし、そればかりとはいえない。かれ自身も書いているように、第一次世界大戦、ロシア革命、ドイツ革命を契機として訪れた「危機の時代」を、大杉は敏感に感じ取り、それに対処しうるアドヴァイザーとして、バクウニンに着目していったのではないだろうか。前に述べたマフノ運動や「労働反対派」への注目なども、かれの嗅覚がいぜんとして健在であることの証拠ではあるまいか。

だとするなら、大杉が「運動から脱落」したり、アナルコ・サンジカリズムに見切りをつけたり、共産党に色気をみせたり云々の見解には、ぼくは賛成できない。ぼくは、せっかく大杉が手がけはじめたバクウニン研究を、ごく一部の青年グループをのぞいて、ほと

んどのアナキストが継承発展させることなく、クロボトキン主義の祖述に終った歴史的な事実、見方をかえれば、大杉の到達した段階からほとんど一歩も前進せず、大杉がのこした方向指示を見逃したことを口惜しくおもふ一人である。バクウニン研究をつうじて、日本のアナキズムは一歩も二歩も前進し、歴史を変えることすらできたかもしれない、こうぼくはかんがえている。

もつとも、これとて、他の人々の見解とおなじく「希望的コース」の一つにすぎないかもしれない。しかし、ぼくにはかれのこの着目は、けつして偶然ではない、なみなみならぬ眼力あつてはじめてなしかうることとおもえてならない。なによりもまず、大杉は「眼の男」なのである。

(「幸徳 大杉 石川」北日本出版昭和四十六年刊より)

(了)

黒の手帖

定価250円(〒55円)

2号分600円/4号分1200円(〒共)



●第17号

「大杉栄の旅」小惑(2)秋山清
ランダウアー・生涯と思想(下)
長谷川進

民族と土地 ランダウアー
船の思想(2) 菅田正昭
朔風 宋世何
スペイン革命におけるCNT
(15)ペイラツ
十年後の廻りに 大沢正道

●第16号

「大杉栄の旅」小惑(1)秋山清
ランダウアー・生涯と思想(上)
長谷川進
人間における遊戯と労働(上)
大沢正道
船の思想(1) 菅田正昭
スペイン革命におけるCNT
(16)ペイラツ



黒の手帖社

東京都新宿区北山伏町33(大沢方)
振替 東京 102405

意識革命 の書店.

現代の苛烈な絶
望的状况の中に
あつて真の実存
的空間をもくろ
む.....

若者の思索情報の広場
ミニコミ自主流通センター
『苦悩舎』



東京都渋谷区恵比寿西2-8-6
TEL (03)461-6354 (A.M.11:00-P.M.7:00)